

龍神シンポジウム

執論3時間 若者からのメッセージ 「龍神村から語る地域社会の今日・明日・未来」



シンポジウムの様子

6月3日、田辺市龍神村ドラゴンパークで開催されたシンポジウムには、豪雨の翌日にもかかわらず、村内外から57名の参加があり、伊藤研治副実行委員長と後援の県地域・自治体問題研究所の大泉英次理事長の挨拶の後、コーディネーターの鈴木裕範理事の進行で始まりまし

(文責 事務局長大前和久)

鈴木：今日のシンポジウムを企画した始まりは、平成の大合併をどう捉えればいいのかでした。平成の大合併は、2025年で20年になります。自治体の財政基盤強化、地方分権推進を掲げて、国は強力で市町村合併を推進したわけですが、その結果、全国の市町村は半分、和歌山県も50市町村が、30に集約されました。

新田辺市は、5つの市町村が一緒になって誕生しました。龍神村は消えましたが田辺市龍神村とい

う言い方で村の名前を残した。龍神に対する皆さんの愛着や強い思いがあったからに他なりません。翻って、全国どの地方でも人口減少、少子高齢化、基幹産業の衰退が進んでいます。しかし、龍神に村の現在を生きる若い世代もいます。そうした人たちの代表として3人にお越しいただきました。3人には自作のパワーポイントを使い発表してください。

最初に、加藤麻希子さんお願いします。最後に、大阪に出たときは、独身時代を謳歌しましたが、ここでお茶は作れないなど思ったのが、龍神に帰りたいと思っただけなのかもしれません。

龍神にいる理由、 パネラーからの報告

加藤：それでは自己紹介をかねて私と龍神との関わりから報告します。生まれも育ちも龍神村福井、

福井の秋祭りは、11月3日に行われる荒島神社の祭りです。昔からお祭りは、男の人が中心でした。私は子どもの頃からずっと太鼓にひつつき回って育ちました。宵宮の晩と当日の晩に、各3地区、それぞれ選ばれた子どもと大人が太鼓をたたきます。中学2年のときに、「たたくか」って言うてくれたのですが、ここで時代の壁と

実家から200メートル位のところに住んでいます。高校進学で田辺に出て寮生活。そこから短大進学で岡山県に出て、就職で戻りました。ここで9年働いて、今の仕事の資格を取るために、大阪に出て、また戻ってきました。Wタインかなと思います。家族は龍神森林組合勤務の夫と、小学校3年、1年の長男、長女の4人家族です。仕事は田辺のNPO法人で若者の

就労支援をしています。新緑の時期のお茶摘み、龍神の番茶が大好きです。子どもの頃は春は野遊びが大好きで、ただはっぱを摘むというお茶摘みは大嫌いでした。夏は川で泳ぎ。秋のお祭りの笛、太鼓が大好きでした。冬に雪が降った日は雪遊びという時代でした。のびのび育ってきたように思います。

目次

龍神シンポジウム

執論3時間 若者からのメッセージ

「龍神村から語る地域社会の今日・明日・未来」…………… 1

「和歌山なら安心だよ」を目指して

わかやま地域おこし協力隊ネットワーク代表 橋本 美奈さん… 6

わかやま住民と自治

発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9 太田ビル203号
TEL・FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp 2023年7・8月号

年流れたことがありました。でも3年のときに、女の子で初めてたかせてもらえたのが、すごくありがたかったなと思います。今では男や女とは言わないのが当たり前です。

龍神で子育てをしていて思うことは、自然があつてアットホームな地域で、子どもたちも、地域の方に見守られ、龍神の四季に触れながら育つていける良さがありません。学校給食も自校給食で本当においしい。あと、赤石先生も担当してくれている長期休暇の子ども居場所がとても充実しています。もう少しこれと思うのは、学校で地域を知る機会をもっと持つてほしいです。また、お店が減って買物の機会がない。あと習い事の選択肢も限られてくるということもあります。町だつたらもう少しいろいろな経験をさせられるのにと

思ったりします。

鈴木：次に「龍神はーと」副代表で道の駅ごまさんスカイタワー店长、宮代生まれの小川直さんです。小川：自分が今、取り組んでいることについて話します。

写真はうちの実家から見える棚



報告するパネラーの加藤さん

田の自慢の景色です。今は、ほぼ荒れた状態で、ぼくが何もできないのに田んぼをやる土地を借り、草ぼうぼうにしています。今、35歳で、家族は田辺で妻と娘が2人おられます。

ぼくは高校が日高中津分校で寮生活。余り勉強は得意でなく、野球をやっていた関係で岐阜に行き人間福祉学科人間福祉学部、いまだに理解できない学部で、ゴミのような大学生活を過ごしました。実家が花木、サカキなどを扱っていた関係で、大阪の生花市場で3年間働いて帰ってきました。

なぜ帰つたのかというところ。「好きに過ごしたい」と言われていたのですが、母親から「ちよつと助けてほしい」という連絡があつて、また、実家の祖父母との約束もありました。帰つて良かったと思つたのは、家の御飯がおいしいし、何もなくて楽だなど。でも同世代が龍神を離れていて遊ぶ友達がない。あと車がないと生活できない。村に若い女性がなく一生出会いがないと心配しながら毎日生活をしていました。

帰つてきたときはやる気もない、やりたいことも分からない。スカイタワーでは、後で発表される正木さんが店長をしていた頃で、多分めちゃくちゃ腹立つような感じだつたと思います。ちょうど5年前位に、正木さんが辞められた後も、やる気は起こせませんでした。そのうちコロナで本当にお金が払

えなくなり。それからコロナを言い訳にしないで頑張ろうと思ひ始めて、今はもうやる気満々です。スカイタワーからの景色どうです。春の新緑、夏は星空、秋は紅葉があつて、冬には樹氷が見える。そんな中で、この景色、ぼくだけ写真に収めても家族に自慢するだけだから、SNSを活用することにしました。ソフトクリームも東京や大阪で流行っている映えるものを導入する。飛び出し看板とかもやつて、これが結構ライダ一の方とかが写真を撮つてくれました。ソフトクリームは、8カ月間か営業できない。去年は2万本売れました。形をフルオーダーで、普通のソフトクリームに比べ巻くのが難しいのですが、ぼくの特技になりました。

スカイタワーの運営の他に、母親が始めた「龍神はーと」で地域産物の商品づくりもやっています。先ほどの棚田で無農薬、無化学肥料栽培の金ゴマを作りました。国産のゴマの流通がほとんどない中で、すぐに売り切れました。

龍神味噌、龍神マッシュのしいたけや、青梅のピネガーやシロップを使った商品など和歌山や龍神の産物を使った商品の開発販売をしています。それと、龍神特産の柚べし、2年ぐらい作つてなくて、ずっと守り続けたいいけないと思うので、今年は年間500個ほどですが復活させました。

母親を見ていて、時代の変化を恐れないところがすごいと思うので、ぼく自身のこれからは常に前向きにチャレンジしていこうと思つています。

鈴木：自分自身の居場所探しは難しい。お母さんを超える龍神の人になつてもらいたいと思います。赤石さんは龍神で長く教鞭を執つていました。卒業後に多くの教え子は龍神を離れて行ったことと思います。どう思うか教えてください。

赤石：新日本婦人の会の赤石と申します。配つたプリントに紹介を書いています。自身の振り返りからお話します。

高校から家を離れて、仕送りと奨学金、バイトで高校と大学を出ました。よく母から、味噌をなめてお前を大学にやつたと言われました。自分が大学の時、龍神の同級生はほとんど働いていました。自分だけ、親のすねかじつて勉強していいのかと、ちよつと思ひました。でも、いろんな人と交流する中で、自分が大学で学んだことを社会に返していくことは意味があると思つたのです。

先生になつて、龍神で採用されるとき理想は高かつたです。へき地で、子どもの数は少ないし、交通の便も大変やし、でも、ここでしかできない教育をして、都会の子には負けん子にしなければと思ひました。基礎基本をしっかり身につけて、本を読んで、考えて、

将来自分が困難に出会つたときに、自分で切り開いていける子になつてほしいと思つたのです。ちょうどそのときに兵庫県の東井義雄さんが、「村を育てる学力」で、田舎の子は、賢くなつたら医者や弁護士になるけども、それは村を捨てて、学力をよそで使つていて、そうでなく将来村へ帰つてきて、村で生かせる子になつてほしいと思ひ書いていて、すごいと思つたのです。

私も、帰つて来てほしいと思ひましたが、卒業生の思ひは、帰つてこれたらいいが、仕事がないからそうもいかん。どこで暮らしても、自分に合う仕事を見つけてしっかり生活できる大人になつたらいいと思ひ送り出しました。

鈴木：これまで発言された3人は龍神生まれの方々ですが、確か、龍神には毎年10人前後の人たちが移住してきていると聞きます。小又川の正木吉紀さんは、移住されてきたお1人です。

正木：龍神村に移り住んで、15年目になります。

1977年生まれ45歳、小又川在住。小又川でバンガローを経営しています。家族は、妻は紀美野町出身で、娘が3人、17歳、13歳、9歳です。新潟で生まれて、大学で東京に出て10年ぐらい住んでいて、花屋で働いていた時に妻と出会い、長女を授かり、長女が3歳のときに龍神村に移住してきました。当時私は30歳ぐらいでした。



パネラー小川さんと正木さん

龍神村に移住してきた理由は、腰を据えて子育てがしたいと思ったからです。それにしても、なぜ龍神だったのか。それはドラゴンボールにドハマリしたオラにとつては、すぐく当然な選択だったのです。龍神村という名前を知って、まず下見に来ました。

移住は妻の出身の和歌山かなというのがあります。龍神村というワードに縁があつて、空き家の検索で見つけたのが今住んでいる家です。下見に来たのが2008年の5月、新緑のすごく奇麗な時期でした。即決して半年後に移住してきました。

移住して2年間は自給自足の暮らしを目指して野良仕事にいそみしました。次女をおんぶしながら畑仕事をいろいろやりました。御坊の就農支援センターに勉強に行つたり、近所の師匠に習つてお茶づくりもしました。今も毎年、ラ

イフワークでお茶づくりをしてい

ます。

2011年、「龍神はーと」に所属して、スカイタワーの運営に携わりました。ここで5年間店長を務めさせてもらつてスカイタワーに通いました。この5年間で、私を村民にしてくれたと思います。「龍神はーと」代表の小川さださんについて、あちこち行きながら、顔を覚えてもらいました。2011年9月の紀伊半島大水害でスカイラインの土砂崩れでスカイタワーが営業不能になりました。それで、田辺市街にアンテナショップを開設しました。このとき、龍神産品を持つて田辺に毎日通いました。たくさんの人たちの協力で営業できたのですが、もうこのときはへとへとであちこち駆けずり回つた時期でした。

2016年、「龍神はーと」を辞めて、たこ焼きのテイクアウト専門店と、家の庭にカフェをつくりコーヒーや自家製のジュースを販売しました。最初はイベントや道の駅へ週末出かけました。2017年、小又川パンガロの経営を始めました。前のオーナーが、体を壊してやつてほしいという事で引き受けました。その後1棟貸しのゲストハウス、更にテント専用サイトを準備しています。今年から、ゲストハウスを「一棟貸しこまた川の家」、小又川パンガロを「奥・小又川パンガロ」と改名し、この3施設を統合したホ

ームページを作っています。パンガロには最近サウナを新設して5月11日の紀伊民報で紹介されました。

いま45歳ですが小又川の副区長から始まり、いろんなメンバーに加わり、長のつく役割が回つてきます。私は芝居が趣味で、大学で演劇を専攻していました。こつちに来る際に、その夢は置いてきたのですが、今縁があつて、県内の市民劇団に所属しています。その中で、和歌山ゆかりの人物を演じ、和歌山市の孫市まつりで、東映の俳優さんと一緒に出たり、娘たちとバレエで共演したりしています。私ならではの和歌山の味わい方や、子育て、あと地域振興に貢献ですね、龍神に来て願いがかなつていきます。

鈴木：実行委員会委員長の伊藤さん、ここまで、どんなふうに聞きたでしよう。

伊藤：実に頼もしい話をしていただいたので、うれしいですね。

私、65歳になりました。今の世の中を私なりに思う事があります。私は龍神で高校3年まで過ごしました。その時代は、私の感覚で、義務が7割、権利が3割、そんな時代だつたと思います。でも今の世の中は、権利が9割で義務が1割程度になっていて感じています。細かい例を話します。例えば龍神では、国道のすぐ横は、公共で草を刈るのですが、それ以外のところは地域の方がボランティア

で草を刈ります。集落でたまに犬や獣が車に轢かれて死んでいると、近所のおばちゃんや死骸を埋めて石なりを立て成仏させます。でも東京や大阪へ行ったら、道端の草や、犬、猫が轢かれていたら、早く片付けると行政に言つて処分をさせる。すべて税金を使うわけです。田舎こそ義務を前面に出す自分たちじゃないか。対する都会は、権利ばかり主張して義務を果たさない。

まさに私が今、申し上げたように、まず自分たちの力で何とかしよう、自分が思っている田舎のパワーを先ほどから感じました。自分らで、ものを考えてつくつて、形に残して、それを次の世代へ受け継いでいく。昭和の30年代、40年代のように、一つ一つ築きあげて、次の子どもたちの世代には、自由が優先されている世の中に変えていきたいということを真剣に考えています。

村で語る日本の少子化、子育て対策

鈴木：地域に生きるとはどういうことか大事なことだと思います。

それで、今日の朝日新聞の1面には、出生最小77万人、昨年の出生率は最低1・26と書いていました。毎日のように人口減少。縮む日本というニュースに私たちは直面しています。岸田内閣は、異次元の子育て対策を実施する。子育てしやすい国づくりをしようと

てしやすい国づくりをしようと

しています。

加藤さんに若いお母さんの立場から、どうすれば、安心して生育する環境が整うかをお願いします。

加藤：身近なところで感じるのは、龍神みたいな地域は雇用が少ない。そこが一番大きいと思います。雇用があれば人は住むと思うのです。子育ては田辺に住んでというパターンになりがちなのですが、若く結婚して子育てしている家庭が龍神にもいます。龍神で住んで、子育てをする意味を聞きたいと思っています。

鈴木：ここでいま、子育て対策を語る意義を私はこう思っています。霞が関や永田町で考えても、人が生きていく地域、暮らしに根ざした生活者の視点がないと、大きな乖離が生まれる。そういう意味でこの問題を語る意義があると思うのです。その上で、若者の結婚願望が昔に比べなくなっているとか、子どもがいらないと考える若い人が増えているとか言われています。この2つの問題は、どんなふうに思いますか。

加藤：私は若い人たちの相談業務が主なので、毎日関わっています。いろんな人がいて、若くしてシングルマザーでサポステに来ている方もいれば、結婚願望はないという方もいます。普段、何でと思うことはないのですが、昔に比べて大人の趣味の幅というか、ネット

の普及だとか、そういうのが止まっているのかなと思ったりします。

シングルマザーで子育てするのは本当に大変です。私は実家の両親の力も借りながら働いているのに、1人での子育ては、子どもはよく熱を出すので職場を休まなければなりません。今の制度で、今の状況では難しいのだと思います。受入先とかも少しずつ増えてはきていますが、お金がかかって、そのお金を稼ぐために働いて、どうしてものだらうと、そんな相談もあります。昔のように、地域みんなで、子育てみたいなのが、減ってきているという感じはします。

鈴木：人のつながり、コミュニティの変化もみのがせません。若いお母さんは大変忙しいとおっしゃるのです。赤石さんはどう見えているのですか。

赤石：さつきも言われた子どもの居場所という、長期の休みに子どもを預かる事業に係わっています。預かるのは6時半までですが、麻希子ちゃんみたいに田辺市街まで働きに出て、子どもを迎えに来る。その後、御飯をつくって食べて、風呂に入れてとすごく大変やと思います。私はずっと常勤だったから、それなりのお金も頂きましたが、すごく忙しくて、人の子どもは教育できても、自分の子どもはほったらかしでした。忙しくてゆつくりと子どもと関わってやれなかった反省があります。田辺まで働きに行っているお母さんら

もすごく忙しくて、パートで稼いだお金が、子どもの教育費に回って、子どもとゆつくり話ができません。村内で女性は、ほとんどの人がパートで働かないといけないし、賃金も安い。いっぱい力がある女性がいるのに、途中で辞めて、そのあとはパートで働きます。力のある女性が出産とか育児を契機に、その力を伸ばし切れていない世の中が、私の時も、まだいまだに続いているのが、すごく情けないなあと思うことがあります。

鈴木：女性が持っている能力が十分生かされていないこの国の貧しさが赤石さんの話で伝わってきました。岸田内閣の子育て施策の中でも、夫の役割について触れられています。正木さんどうでしょう。

正木：ぼくは子育てがしたくて龍神村にきたのですが、とにかく龍神で生活する。まさに生存するために、どう協力したらいいかを考えています。

うちに関しては、料理は基本的に妻がするのですが、朝御飯は私が準備します。娘たちの弁当も毎朝私がつくっています。洗い物は私がやります。逆に妻は洗い物が苦手です。私は洗濯が苦手で、妻はその辺、逆に好きだったりするので、うまくかみ合っていると思います。

ぼくはここに移住して今でもベストな選択をしたなと思っているので、移住に興味があつて来るお客さんも結構いて、子育てするに

はいい場所だと言っています。子育てに最良の地域、龍神村にするには、それをみんなで共有する。また、それを制度化するのは政治の仕事だと思います。ただ、生活するためにみんなが起業できるかといえは、そうはいかないと思います。そういった移住などの受入れができるように、自分の経験を増やしなげられたらと思います。

鈴木：私は忸怩たる思いで聞きました。正木さんは優れた生活者だと思うのです。

龍神村の 将来・未来はあるか

鈴木：それでは次の質問を、龍神村の将来はあるのだろうかということ。

ここで生活していくには働く場所や、稼ぐことができるかが、極めて大事です。龍神で産業といえば林業や観光業があると思うのですが、小川さんには龍神観光の将来的な可能性についてどう思っているか話してください。

小川：そうですね、龍神といえば観光、温泉ですね。温泉にはぼくは余り入ったことはないのですが、地元の人あまり入ったことがないようです。お客さんに聞かれたら、お湯はいいですよって言うのですが、実際のところ1300年の歴史があつて、今まで皆さんが守り続けてきてくれたすばらしい

ものなのですが、実際、子どもたちは知らないじゃないですか。

鈴木：龍神温泉がシンボリックな存在ですが、ただ温泉をめぐる日本人、世界も含めて楽しみ方も変わってきています。観光や食についても変わってきている。その中で、今の観光の在り方を考えなくてはと思います。

自分たちはどこにいるのか、自分たちの地域の特徴とは何か知らなくてはいけない。

小川：外国人の方、インバウンドとか、高野山から本宮へ聖地巡礼バスが走っています。コロナが終わってからお客さんも増えてきています。龍神温泉を守りつつ、

もっといろんなことをしたいと思うのですが、その答えをぼくはまだ見つけていません。積極的に外国人の方を受け入れる体制や、今まで力を入れられていないことに取り組めば、変化は見えると思います。

鈴木：観光のカタチもニーズも変化が目まぐるしい。これまで小川さんが取り組んできた、SNSを活用した様々な情報発信。インスタ映えのする食をつくりたいとか、そうしたものは、今までの龍神が弱かったところですし、小川さんのような新しい発想が龍神の観光の中に、もたらされれば、新しい可能性が広がると思います。龍神の観光客は、年間60万から70万ぐらいで、日帰りが多くて、宿泊が比較的少ない。それとインバウン

ドが少ないですね。龍神の観光の将来を考えたときに、もっと新しい在り方があると思います。

もう一つの基幹産業には林業があります。林業がよみがえれば、村がよみがえると思ったりします。事前に林業関係の方を紹介していただきました。平岡さんと大江さんです。林業の再生について一言ずつお願いします。

平岡：龍神温泉の取り組みをみんなで作っている平岡で、元々は林業家です。木は成長してたくさん切れますが、材価が大変低迷しています。今までは、建築用材として出してきたのですが、今はほとんど使われなくなりました。家1軒建てるのに、木材の使われる量は単価的にぐくられています。あと、少子化で家も建たない。たくさん切つてどうするかと言えは、今度はバイオマスで燃やしてください。一生懸命つづいて、燃やされるのは林業家としては情けないです。

ごく普通の家は集成材、そういう木の単価は、1万3000円位の並材でいいわけです。60年、70年育てて、切り出し1万円、市場手数料10パーセント、1300円取られて、トラックで運んで、山主さんの手取りは限りなくなります。だから林業は、再生産ができない産業です。お父さんとかおじいさんがつくつてくれた材を搾取していくような状態です。私は『絶望的林業』という本を読みました。なるほどと納得しまし



伊藤さんと赤石さん

た。
鈴木：そうした大変厳しい状況で、大江さんのように林業を自分の仕事にした人がいる。
大江：私は、家業は林業ですが、帰ってくるつもりは、全くありませんでした。大学を出て、就職活動で、手に職をつけたいと思いい、中小企業を回っていたのですが、あるときに先ほどの方も言っていました、最近、空が見えない、龍神で育ったので、そういうのが恋しいと思う気持ちがあったのでしよう。先祖が守ってきた大地があつて、自伐林業といいますが、自分で植えた山を自分で切つて出してお金に換えていく、そういう林業を、貴重な選択肢だと思ひ帰ってきました。

私がこの林業に就いて20年たちました。この先の未来という話です。皆さんの力を借りればどうにかなるかなと思います。ただ、業界としては、平岡さんがおつしやつたように大変厳しいです。ただ、うちの場合には、山には木だけではなく、いろんなものが生えているので、複合林産業と言つて山に生えるいろんなものを換金しています。サカキとか、種類はいろいろあるのですが、そういう方向で努力しています。生産額では、木の生産額とそちらの生産が大体同じくらいの状況にあります。何とか自分のところは生き残つていけるのかと思うのですが、林業は、大変苦しい状況なので、木の新たな使い方を考えていかなければなりません。

鈴木：そうした発想や挑戦に学びたい、希望も感じさせてくれる話だったと思います。ポリシーなき林業政策に振り回されている山村、林業の現状があると思うのです。その中で、木を育てると共に、山の中にある様々なものを資源として生かす、山の中には使われぬ資源がある。
 今日、お越しの方で質問があれば、いかががでしょうか。
会場から：パネラーの方にお伺いしたいのが、龍神で子育てをされてきて、もっとこうだったらよかつたのにと言うのがあれば、お願いします。
正木：龍神小学校に通わせていますが、子どもがのびのびと学校に通つて、先生たちと遊んで、地域の方もそれを見守つて、運動会もみんな楽しんで、先生とPTA

20年、30年後の私と龍神村

の距離も近く、本当に子育てするにはすごくいい環境だと思つています。でも、習い事では不向きがありました。子ども達は、バレエやピアノを娘3人みんな同じように習わせました。バレエの日に合わせて田辺で習うのですが、時間的な問題で、結構大変なのです。子どもを長時間車に乗せて負担もかけます。
加藤：私は、実家が近いのも大きいと思ひますが、子育ては大変しやすいです。地域の方が、季節のお野菜をくれて、今晚のこの大根は誰々さんとこのやで、この菜っ葉は誰々さんとこやでと言ひながら頂いています。田舎でのびのび私も育つてきたから、その辺で私自身はしやすいです。

鈴木：ほかにどうですか、なければ、パネラーに最後の質問して終わろうと思います。パネラーの方が50代から60代になったときに、龍神村はどんなふうになつていくでしょうか。加藤さんから行きましようか。
加藤：人生の大半は、仕事があつたかと思つたのでその視点になるのですが、雇用があるのに地元に残らない。高校を卒業して出ていくか、進学しても戻つてこない。そこがうまく行けばなというがあるのです。私の甥が21歳で、3年前

に卒業して、地元就職を希望したのですが、その理由を聞いたときに、お祭りができるからと答えました。それが魅力があつて引きとめるものだと思つたら、もっと魅力的なものとか元気な龍神にはこの人がいるからとか龍神の価値を磨いて、私らがもつと元気になることで、移住なり戻つてくる人が増えたらいいなと思ひます。
鈴木：小川さん、どうでしょう。
小川：さっきの林業の話聞いて、すごく楽しいことがあるのですよ。それは平岡さんがやられている、温泉街へのクマノザクラの植樹で、ぼく、初めて木を植えました。30年後には龍神の人みんなでハッピーにクマノザクラ見たいと思ひます。

鈴木：正木さんの一番上のお子さんは17歳。そのお嬢さんが、龍神には残らないと言つてそうです。次女さん、三女さんもいると考えると、何を伝えるのかということを最後お聞きしましょう。
正木：長女は3歳まで東京にいたというのもある、その記憶があるのか、龍神にはパパとママが勝手に来たというのです。それも最初に言われていて、今、進学を希望して勉強していますが、戻らないつもりで出ていくと今の段階では言つていません。娘には、自分の居場所を見つけてなさいと言つています。
 2番目、末娘は龍神で生まれ育つていて、またちよつと思ひも違

うようです。末娘は植樹祭と一緒に参加したり、率先してバンガローを手伝つてくれて、後を継ぐと言つてくれたりしています。子どもたちが将来どうなるか分かりませんが、そのときに、帰ってくる場所を残してあげたいと思ひます。
鈴木：予定を大幅に超すシンポジウムになりました。若い世代の話、私は希望をもつて聞きました。元気ももらいました。しかし、そうした若い世代の意見や声は、ふだんだけ村の中にかかされていくのか。そういう、伝統の引継ぎとか、こういう考え方、価値観、この国であまり大事にされていないけれども、その伝統つていうものの大事さみたいなものも語つていく、そういうものが必要だと、それは家庭や学校だけではなく、先ほどの話にもあつた、地域のコミュニティの中でつと語られていて、次の世代が育つと思ひます。今回この実行委員会と、それから研究所の方で、シンポジウムを開催させていただきましたが、若い世代が、あるいは女性でもいいし、伊藤さんの世代の方々が集まつた、そういう議論の場でもいいし、いろんな場が設けられて地域づくりがみずから手で検討されて行つたらいいと思ひます。これは、期待であり注文です。今日のこれがキックオフです。本日はどうもありがとうございます。

「和歌山なら安心だよね」 を日指して

わかやま地域おこし協力隊ネットワーク代表 橋本美奈さん



橋本美奈さん

今年1月に発足した「一般社団法人わかやま地域おこし協力隊ネットワーク」(以下、「協力隊ネットワーク」)は県内の地域おこし協力隊の各種サポートを目的に設立された7名の卒業隊員で結成されたチームです。①協力隊に関する相談支援。②期間終了後の起業など定着支援。③協力隊の募集活動支援に取り組んでいます。元由良町地域おこし協力隊の橋本美奈代表に、発足の経緯や活動内容、地域おこし協力隊支援などについてお話を聞きました。聞き手は大前事務局長です

大前：お忙しい中ありがとうございます。昨年の夏に御坊のシンポジウムでお話をしていた以来ですね。「協力隊ネットワーク」について教えて欲しいのですが、どういった経緯で、出来たのですか。橋本：元々は現役時代に、「横のつながりって大事だよね」というので、今のメンバーと一緒に話をする機会が結構ありました。その自治体の地域に採用されているのですが、

あつて、そこで繋がっていたという事があります。大前：全国的にもこのようなネットワークがあるので、橋本：実は和歌山は早い方なので、全国で18事例目になっています。組織を作るにあたって、1年程前から県の移住定住推進課の職員さんと一緒に「協力隊ネットワーク」について学び、設立メンバーと話し合いを重ねてきました。

なかなか厳しい制度だな。ある方は協力隊員に、大きな負担をかける制度だというふうな言い方をしていました。どんな思いで来て、受け入れ自治体はどう思っているのでしょうか。橋本：それはまあ自治体によって違うのですが、ある程度総合戦略があつた上で、どうしてこの地域に協力隊員が必要なのかをきちんと考えたうえで制度設計する必要があります。それは各自治体の定めるところによるという。魔法の言葉みたいなのがあります。

他の地域の成功事例や、逆に失敗したことを共有することで、活動する上でプラスになる。私は日高なので、日高地域でこんなことしているという情報共有した上で、そのスタイルをうちでも使う。これは、岡山県の先輩が先にされていて、和歌山県にはそういうのはないねというのが1年目(2018年)で、横のつながりで何かをやり始めようと現役時代に始めたのがきっかけですね。

大前：県内の地域おこし協力隊の動向というのは、どうなのですか。この前御坊市に初めて来られたと聞いたし、湯浅町でも2人委嘱したというのですが、全体的に隊員が増えているのですか。橋本：今年4月の全県の着任は10名以上になりました。活動されている方は50人弱ぐらいで推移しているのですが、4月の10名は、かなり増えたという事になります。

橋本：地域によって目指すところは違い、地域の人と行政の方、それに協力隊員が一緒に考えようという事になるのですが、その両社の中間的な組織として私たちがお手伝いできたかなというのが一つの目的で、「中間支援組織」とも言われます。実際に協力隊を3年間やって、自治体さんにはどんな支援が必要なのか1年間かけてみんなで勉強し

大前：現役の時から横の繋がりを作り始めて、チームの7人はそういうメンバーになるのですか。橋本：紀中と紀南は、現役の時からの繋がりで、紀北は、移住者交流会とか、隊員だけでなく移住者の方とも繋がりを作ろうという動きが結構

大前：地域おこし協力隊という制度。都会での生活を投げうって地方に移住し、月20万円程度の給与で、3年間という限られた期間に地域おこしの業務に取り組み、地方で生活基盤を確保し定住をめざす。

協力隊と行政をつなぐ役割

橋本：地域によって目指すところは違い、地域の人と行政の方、それに協力隊員が一緒に考えようという事になるのですが、その両社の中間的な組織として私たちがお手伝いできたかなというのが一つの目的で、「中間支援組織」とも言われます。実際に協力隊を3年間やって、自治体さんにはどんな支援が必要なのか1年間かけてみんなで勉強し

地域おこし協力隊は、都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を異動し、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこし支援や、農林水産業への従事、住民支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組です。隊員は各自治体の委嘱を受け、任期はおおむね1年から3年です。

具体的な活動内容や条件、待遇等は各自治体により様々ですが、総務省では、地域おこし協力隊員の活動に要する経費に対して隊員1人あたり480万円を上限として財政措置を行っています。また、任期中は、サポートデスクやOB・OGネットワーク等による日々の相談、隊員向けの各種研修等様々なサポートを受けることができます。任期終了後の起業・事業継承に向けた支援もあります。

令和4年度で6,447名の隊員が全国で活動していますが、地方への新たな人の流れを創出するため、総務省ではこの隊員数を令和8年度までに10,000人とする目標を掲げており、目標の達成に向けて地域おこし協力隊の取組を更に推進することとしています。

(総務省 HP より)

してきました。地域や自治体ではどう考えているのか、協力隊員はどうなりたいか、どうなってほしいか、どうゆう説明をしているかという体験談だったり、他の全国の協力隊ネットワークの事例など色々参考にして、この地域でベストな事を一緒に考えましようと言っています。

後就職先がない時には、起業してもらおうという結論に至った場合。職員さんだつて起業の勉強をしているわけでないし、自分で起業したこともない。協力隊員のサポートが非常に難しいので、起業している県内の卒業生が一定数います。その人達の力を借りてくださいます。とかタイミングを見はからつて、起業向けの研修を県と一緒に紹介したりしています。

橋本：私達とのつながりも大事だと思えますが、担当者さん同士がつながる事も大事だと思えます。行政にしかわからないこともあるし。でも行政がどんなことを考えているかと言うのは隊員にとってもすごく大切な事なので、そういう機会も設けています。

大前：協力隊員を募集しても、応募がないという話も聞きますが、どうなのでしょう。

大前：相談は、協力隊員からと担当者との両方あるのですね。どんな形で応じているのですか。

大前：紀南と紀北で、担当者を含めた協力隊員の研修会をやられて、自治体の担当者ともつながりをつくったりしているわけですね。

大前：私達とのつながりも大事だと思えますが、担当者さん同士がつながる事も大事だと思えます。行政にしかわからないこともあるし。でも行政がどんなことを考えているかと言うのは隊員にとってもすごく大切な事なので、そういう機会も設けています。

大前：募集して着任したが、思ったのと違うとなつてしまつたと、地域もダメージだし隊員も不幸です。その前の設計や3年間をどう過ごしてもらうかを、どれだけ地域と自治体が理解した上で、着任される方と、うまくコミュニケーションをとっていくかです。

大前：募集要項とかでは、その地域との絡みがどうなっているのか、なかなかね。奥深いですけれどね。

橋本：地域との調整も2者になつてしまうので、自治体と地域となると、そこに違う人

受け入れ態勢づくり

とか、卒業生とかが入ると話しやすいかなるので、関わっています。

大前：自治体にとってはプラスの制度ですね。特にそれを取り組む事によって、担当者や自治体が鍛えられる。

橋本：それはもう全然違うと思います。毎年のルーティンの制度ではない。常に動きがある。

協力隊員がクローズアップされますが、中間支援的な仕事をさせてもらう中で、この制度は、自治体のための制度なのだと思えます。

自分たちで考えて、地域にはこれが必要だと納得した上で人を受け入れようとする姿勢にもなっています。

大前：その自治体に担当者だけでなく、バックアップしてくれるような人や体制があって、その担当者も仕事が出るのでしようが、担当者だけが言っても、逆に燃え尽きてしまいうすですね。

橋本：そうですね。一人ががんばっているような方に私たちがサポートに入らせてもらう制度になっています。そして、そのトラブルも含めて、

地域にとってはプラスだと思

うのです。何処で失敗したか教訓にできれば、地域起こし協力隊のチャレンジをやめないう限りはそうだと思います。

主はあくまで地域で、協力隊ではないと思うので、結構協力隊の方も、担当者がどう

みたいな話とかをされる方がいると思うのです。行政の担当者さんも地域の人やから、

行政も含めた地域と捉えないといけない。結局地域全体がクライアントという。そう捉えないといけないと思っています。

ネットワークの

これからの目標

大前：ネットワークのこれらの目標というのはどうでしょうか。

橋本：全国的に見ると和歌山県の人口規模では、大体秋田県と同じくらいなのですが、秋田県では協力隊員は100人以上いるのです。和歌山

は52、3人なので、こういったところは全国平均を目指しているような、サポートを我々が出来ればいいなと思っています。

先日知事にもお会いして、

お知らせ

第65回 自治体学校in岡山 7月22日(土)～24日(月)

岡山市立市民文化ホール他

●22日(土) 全体会ほか

記念講演① 地方自治と地域 この1年から考える
中山 徹 (自治体問題研究所理事長)

記念講演② 地域の主権を大切に、ムニシバリズムの広がり
岸本聡子 (東京都杉並区長)

●23日(日) 分科会・講座ほか

分科会 (10テーマ) 公務員改革、医療・公衆衛生、地域づくり、自治体プラットフォーム化、少子化、介護・福祉、自治体民営化、学校統廃合、公共交通、水道広域化

講座 (2テーマ) 自治体政治・行政、自治体財政

●24日(月) 全体会

特別講演① 暮らしから考える自治体行政のデジタル化
本多滝夫 (龍谷大学教授)

特別講演② 地方自治体が直面する課題への挑戦 (現場から)
太田 昇 (岡山県真庭市長)

詳しくはQRコードで <https://www.jichiken.jp/event/230722/>



第13回 和歌山住民要求研究集会

10月7日(土) 10時～16時

和歌山県勤労者福祉会館 プラザホープ

記念講演 平和的生存権と人格としての社会保障～憲法、世界

講師 井上 英夫 (金沢大学名誉教授)

分科会 第1分科会 子育て・教育
第2分科会 医療・福祉・介護
第3分科会 産業、経済、町づくり
第4分科会 農林水産業

参加費 1,000円

令和8年には1000人を目指しますと宣言をしてきて、それはしなければなりません。
大前：令和8年、3年後ですか。

橋本：総務省が現在の6,400人から1万人を目指すと言っているのが令和8年なのです。だから和歌山は1000人だということです。

近畿、関西で協力隊員を目指すかと思つたときに、とりあえず和歌山を見ようと

いうような風潮を作つて行きたいと思つています。今は協力隊で、何も知らない状態で調べる中国地方とか九州地方がたくさん出てきます。近畿といつても、まだ和歌山は突出していません。

近畿の中では環境が整つていて、みんなが楽しそうにしていて、定住率も高くて、隊員同士もちゃんと繋がっている。応募する側なら「とりあえず和歌山県なら安心だね」と

考えるようにしたいと思えます。また協力隊制度がうまくできるようなになると自ずと移住者さんもそういう風になるんじゃないかなとも思っています。

大前：本日は貴重なお話ありがとうございました。今後の協力隊ネットワークのご活躍を期待いたします。